

# 「取り消し可能性」をめぐる議論について

加 藤 雅 啓\*

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

## 要 旨

本稿では、文の解釈に関して、統語的にコード化され、意味論的に規定された解釈と推論により語用論的に導かれた解釈について、その意味解釈に関わる手続きを検討する。その際、コード化された意味と推論による意味の棲み分けについて、その根拠を解釈の「取り消し可能性 (cancelability)」に求め、統語論の現象に語用論が密接に関与していると思われる関係詞化と話題、及び主語からの外置などの事例を分析し、その妥当性を明らかにしようとするものである。

## KEY WORDS

cancelability 取り消し可能性 inference 推論 pragmatics 語用論 grammar 文法  
relativization 関係詞化 extraposition 外置

## 1 はじめに

本稿では、文の解釈に関して、統語的にコード化され、意味論的に規定された解釈と推論により語用論的に導かれた解釈について、意味解釈に関わる手続きを検討する。その際、(i) 当該の事象が文法領域と語用論領域のどちらの領域に属するのか、(ii) 関係詞化と話題、(iii) 主語からの外置と語用論的条件等の問題について、コード化された意味と推論による意味の棲み分け、すなわち統語論と語用論の棲み分けについて、解釈の「取り消し可能性 (cancelability)」を判断基準としてこれらの課題を分析し、その妥当性を明らかにしていくことにする。

## 2 文法領域と語用論領域の判定基準

ある事象が文法の領域に属するのか、あるいは語用論の領域に属するのかという問題に関しては、Katz (1977), Kempson (1975, 1977), Levinson (2000) など、さまざまな議論がなされてきた。Nemo (1999) は意味論と語用論を二分するための35に及ぶ概念について言及しているが、Ariel (2010) は次のような10の判定基準を提示している。

### 2. 1 10の基準

Ariel (2010) はある事象が文法的な事象であるか、あるいは語用論的な事象であるかを判定する10の基準を提示している。これらの基準は意味論的基準 (meaning criteria), 分析的基準 (analytic criteria), 認知的基準 (cognitive criteria) の3つに分類される。意味論的基準には i) 文脈依存 (context dependency), ii) 非真理条件 (nontruth conditionality), iii) 黙示的・二次的 (implicit and secondary), 分析的基準には i) 談話単位 (discourse unit), ii) 文法外的説明 (extragrammatical accounts), iii) 容認性判断 (acceptability judgments), iv) 自然性 (naturalness), 認知的基準には i) 言語運用 (performance), ii) 右半球特化 (right-hemisphere specialization), iii) 推論 (inference) を挙げている。

紙数の都合上、本稿の議論に直接関わる文脈依存、非真理条件、推論について簡単に触れることにする。

#### 2. 1. 1 文脈依存

Ariel (2010) はCarnap (1938) の定義を引き、文脈に依存した意味は語用論的であり、もしある言語現象を説明するのにその言語使用者に言及する必要があるならば、その現象は語用論の問題であり、言語表現とそれが指示する現実世界の事物とを関係づけることによって言語現象を説明するのが意味論であると指摘している。

- (1) FLAG SELLER: Would you like to buy a flag for The Royal National Lifeboat Institution?  
 PASSERBY: No thanks, I always spend my holidays with my sister in Birmingham.
- (2) a. Birmingham is inland.  
 b. The Royal National Lifeboat Institution is a charity.  
 c. Buying a flag is one way of subscribing to a charity.  
 d. Someone who spends his holidays inland has no need of the services of The Royal National Lifeboat Institution.  
 e. Someone who has no need of the services of a charity cannot be expected to subscribe to that charity.
- (Ariel (2010: 26))

(1) では、旗売りが王立救命艇協会のために旗を買わないかと呼びかけた際の通行人の返事は、コード化された文の意味だけに基づく解釈では、不適切な応答となる。(1)の文脈に(2a-e)の背景となる想定を補うことにより、初めて(1)の談話が成り立つことになる。この意味で(1)の通行人の発話は文脈に依存しており、語用論的事象であるといえる。

## 2. 1. 2 非真理条件

意味論は真理条件の意味だけを提供し、そして文の真理条件の総てを規定するものと考えられている (Kempson (1975, 1977))。Ariel (2010: 28) はKatz (1977) を引用し, “As put it, semantics should account for “what the speaker actually says with perfect accuracy, that is, the whole proposition and nothing but that proposition. (Katz (1977: 18))” と伝統的な考え方を紹介して、意味論は発話の命題の総てを説明すると考えられてきたと述べている。すなわち、文には文脈の影響を受けず、場面から独立した意味があると考えられてきた。これに対してGrice (1975, 1989) は、文には真理条件の意味の他に非真理条件の意味が存在し、前者は文の真理条件に関与するが、後者は文の真理条件には貢献しないと主張している。

例えば、教室に入ってきた教員が次のように発話したとする：

- (3) この教室は蒸し暑いね。

これを聞いた学生は(3)について、例えば、次のような意味を導くであろう。

- (4) a. [この教室] = [人文棟302教室]  
 b. [蒸し暑い] = [風がなく湿度が高くて暑い]

さらに、この学生は(3)の発話から次のような意味を導くかもしれない。

- (5) a. 窓を開けて、風を入れて欲しい。  
 b. エアコンのスイッチを入れて欲しい。

(4)の意味は、発話(3)の真偽に関わることから真理条件の意味である。一方、(5)の意味は、発話(3)の真偽に関わることはないため、非真理条件の意味、すなわち語用論の意味である。

## 2. 1. 3 推論

Ariel (2010: 50) によれば、文法は個々の領域に固有な規則の集合を含むが、語用論は固有の規則や方略を持つ体系を成しておらず、推論を専らとする分野であると指摘されている。

- (6) We said from the beginning that this will take the time it will take and is indeed taking its time.  
 (Ariel (2010: 50))

(6) はレバノンにおける戦争について語ったイスラエル軍将校の発話である。明示的にコード化された意味は「戦争はそれがかかる時間と同じだけの時間がかかる」というトートロジーとなるが、もちろん、これは発話者が伝えたい意味ではない。実際に伝えたいことは、戦争は人々が望んでいるよりも長くかかるものである、ということである。この解釈は(6)から推論によって導かれたものである。このように、コード化された意味は既定的(determinate)

であるのに対し、語用論の意味は推論的 (inferential) である。

推論による意味は黙示的で、非言語慣習的 (nonconventional) であり、したがって取り消し可能 (cancellable) であるという特性を持つ。一方、コード化された意味は明示的であり、したがって取り消し不可能である。

- (7) a. He ran to the edge of the cliff and jumped.  
 b. Lionel ran to the cliff and jumped over the edge of the cliff.  
 c. He ran to the edge of the cliff and jumped (up and down) but he stayed on the top of the cliff.  
 (Carston (2002: 138))

(7a) の断定発話は (7b) のような命題を表していると解釈することができる。すなわち、「ライオネルは崖の縁まで走って行き、そこから飛び降りた」という解釈である。しかしながら、(7a) は「ジャンプした」と述べているだけで、「崖から飛び降りた」とは明示的に述べているわけではない。したがって、(7c) が示すように、(7a) から語用論的な推論によって導かれた内容、すなわち「崖から飛び降りた」という解釈は、先行文脈と矛盾を起こすことなく取り消し可能であり、代わりに「崖の縁で上下にジャンプした」という解釈を導くことは可能である。

Levinson (2000) は取り消し可能性について次のように述べ、文法的事象と語用論事象を区別する「リトマス試験」であると主張している。

- (8) a. ...insofar as the constructional meanings are *indefeasible*---that is, the interpretations are inflexible and can be specified by exceptionless rule, we may confidently attribute the interpretation to a grammatical source; but insofar as they are *defeasible* and show all the hallmarks of nonmonotonic inference that we associate with pragmatic inference, we should attribute the preferred interpretation to pragmatics.  
 (Levinson (2000: 265))  
 b. Defeasibility has to be, as far as I can see, the litmus test for a grammatical versus pragmatic account of linguistic patterns.  
 (Levinson (2000: 408))

Levinson (2000) によれば、文の構造から導かれる意味が取り消しできなければ、その解釈は文法に起因すると判断でき、一方、それが取り消し可能であれば、その解釈は語用論に起因するものであると判断することができる、と指摘している。この意味で取り消し可能性は、ある事象が文法的事象であるか、あるいは語用論的事象であるかということを判定する信頼性の高い判定基準であると思われる。これらのことから、文法と語用論の棲み分けについて、次の判定基準を導くことができると思われる。

- (9) a. ある事象の意味解釈について、それを合理的に取り消すことができなければ、その事象は文法の範疇に属する。  
 b. ある事象の意味解釈について、それを合理的に取り消すことができれば、その事象は語用論の範疇に属する。

### 3 統語論と語用論の棲み分け

#### 3. 1 関係詞化と話題

一般に、文法的事象は義務的であり、純粋に言語的要因をもとに形式的な説明を求めるものである。したがって、文法は文における記号と記号との構造的関係に基づいて規定されるものであり、話し手・聞き手・場面などの語用論的要因とは独立して存在するとされてきた。

しかし、機能論の立場から、従来、文法的事象と考えられてきた現象には、機能的要因が深く関与している事象も含まれている、と主張する研究者もいる。これに関して、Kuno (1976) は次のように指摘している。

- (10) Much (in fact, too much) has been done in search of syntactic phenomena that, I believe, are basically controlled by nonsyntactic factors. By taking a purely syntactic approach, one can achieve a certain degree of success in one's analysis if semantic factors have consistent syntactic realizations with respect

to concepts such as subject, object, etc., or with respect to command and precedence relationships and relative heights in constituent structures. However, such an attempt fails crucially where the underlying semantic factors do not show one-to-one correspondence with syntactic factors. (Kuno (1976: 438))

純粹に統語的な分析が一見成功しているように見えるのは、意味的な要因が主語、目的語などの概念や「先行・統御」関係、あるいは構成素構造の相対的な位置などに関して、統語的に具現化された形式を伴っている場合があるからであって、根底的な意味的要因が統語的要因と一対一対応を成していない場合は、そのような分析は失敗に終わるのである、とKuno (1976) は指摘している。

Kuno (1976) は、関係詞化には話題<sup>1)</sup>が深く関与しているとして関係詞節話題化制約(11)を提案し、次の例を挙げて論じている。

- (11) *The Thematic Constraint on Relative Clauses*: A relative clause must be *a statement about* its head.

(Kuno (1976: 420))

- (12) a. I wrote a book about Marilyn Monroe.

- b. I left home a book about Marilyn Monroe.

- (13) a. This is the actress that I wrote a book about.

- b. \*This is the actress that I left home a book about.

(Kuno (1976: 426))

(12a) では、Marilyn Monroe を話題として解釈できるのに対し、(12b) ではそれはできない。ある内容について本を書くことはできるが、ある内容についてその本を家に置き忘れるということは、通例、自然ではないからである。(13a) では、関係詞化されている *the actress* は話題として解釈できるため適格文となるが、(13b) ではそれができないため非適格文となる。(12), (13) のように、同じ統語構造でありながら、その適格性に相違があることから、Kuno (1976) は、関係詞節化には(11)のような機能論的制約が密接に関与していると指摘し、主要な統語的制約について機能論の観点から見直す必要がある、と次のように結論づけている。

- (14) It is time to reexamine every major “syntactic” process and every major “syntactic” constraint from a functional point of view, to find semantic explanations for its existence in case the syntactic characterization holds, and to find a deeper and more accurate semantic generalization in case the syntactic facts are simply superficial and “almost correct” syntactic manifestations of nonsyntactic factors.

(Kuno (1976: 438))

### 3. 2 主語からの外置と語用論的条件

中島 (1995) は主語からの外置 (Extraposition from Subject) と呼ばれる右方移動現象を取り上げ、外置の統語的、及び語用論的条件を検討している。

- (15) a. A man *who was wearing a T-shirt* hit Mary.

- b. \*A man hit Mary *who was wearing a T-shirt*.

(中島 (1995: 29))

外置が行われていない(15a)と外置が行われている(15b)を比較すると、前者では主語を構成する要素が連続して生じているのに対し、後者ではそれらが不連続で現れていることが分かる。したがって、文を処理する際、後者では一部分を処理した後、介在する別の構成素の処理を済ませてから、再び残りの部分の処理を再開しなければならない、結果としてより多くの労力がかかることになる。すなわち、外置構文は処理するのにより多くの労力を必要とする構文であることになる。

中島 (1995: 29-30) は関連性理論の観点から、より多くの労力を要する構文はそれに見合うだけの何らかの「効果」をもたらさなければならない、すなわち外置要素は「効果 $\alpha$ 」を果たしている場合に限り、適切な要素として認められることになる、と論じている。この「効果 $\alpha$ 」は次のように規定されている。

- (16) ある情報が、先行する文脈に対して「説明」「含意」「強化」「対比」「理由」などの役割を演じている場合、なめらかな結合が成立する。

(中島 (1995: 31))

(17) A man hit Mary *who had hostility toward her*.

(中島 (1995: 30))

(17)の外置要素は「彼女に敵意を抱いていた」ということを伝えており、主節の「男がメアリーを殴った」という内容に対して、その「説明」をするという形で「効果 $\alpha$ 」を果たし、先行文脈に対してなめらかな結合が成立していると考えられる。これに対し、(15b)の外置要素で述べられている「Tシャツを着ていた」という情報は、「男がメアリーを殴った」という内容についての説明にはなっておらず、また含意、強化、対比、理由にもなっていない。したがって、(16)で規定されているなめらかな結合は成立しないため、(15b)は不適格な外置構文となるわけである。

中島 (1995: 34) は「外置の現象は、そのあらゆる側面が統語論によって扱われるのでもなければ、逆にあらゆる側面が語用論によって扱われるものでもなく、ある面は統語論によって、別の面は語用論によって扱われるべきものであろうと思われる。」と述べ、統語論と語用論の棲み分けの可能性について考えるべきであると示唆している。

中島 (1995) が主張する「効果 $\alpha$ 」を具体化した(16)は、語用論的制約として提案されているのは明らかである。それでは、中島 (1995) が挙げた主語からの外置構文は語用論の範疇に属する事象なのか、判定基準 (9) に照らして分析してみよう。

(15) a. A man *who was wearing a T-shirt* hit Mary.

b. \*A man hit Mary *who was wearing a T-shirt*.

(18) [Suppose in some community, a man wearing a T-shirt is labeled as extremely violent to women and often demonstrates violent tendencies toward them even in public.]

A man hit Mary *who was wearing a T-shirt*.

(19) a. Some guests *who were visiting from Chicago* drank milk.

b. \*Some guests drank milk *who were visiting from Chicago*.

(中島 (1995: 22))

(20) [Suppose you know that Chicago is a world-famous place for milk production and that people in Chicago have a custom of drinking a lot of milk everywhere they go. They always brag about the top quality of their milk.]

Some guests drank milk *who were visiting from Chicago*.

(21) a. A man *who was wearing a funny hat* gave Mary a bunch of flowers.

b. \*A man gave Mary a bunch of flowers *who was wearing a funny hat*.

(中島 (1995: 22))

(22) [Suppose you know that in a certain community, a man wearing a funny hat on a festival day has a habit of giving a bunch of flowers to the first woman he meets on the street.]

A man gave Mary a bunch of flowers *who was wearing a funny hat*.

(15b)は外置された関係節の内容が主節の内容の「説明」「含意」「強化」「対比」「理由」などの役割を果たしておらず、「なめらかな結合」が成立していないため不適格文となっている。しかし、(18)のように「Tシャツを着ている男は女性に対して極めて乱暴な男である」という共通認識がある社会では、容認可能な文と認めることができる。

同様に、(20)のように「シカゴは世界有数のミルクの生産地であり、シカゴ市民はどこへ行ってもたくさんのミルクを飲み、その品質を自慢する」という共通認識があれば、単独では不適格である外置構文(19b)は適格文(20)として成立することになる。さらに、不適格な外置構文(21b)も(22)のような「祭りの日には、おかしい帽子をかぶった男は、通りで最初に出会った女性に花束を贈る習慣がある」という共通認識がある社会では、容認可能な文として認めることができる。

(18)、(20)、(22)の例から明らかなように、単独では不適格文である外置構文(15b)、(19b)、(21b)は、適切なコンテキストに置かれれば、最初の意味解釈が取り消され、コンテキストから導かれた解釈が優先され、結果として容認可能な文と解釈される。すなわち、(9b)の判定基準により、中島 (1995) が挙げた(15b)、(19b)、(21b)などの主語からの外置構文は、適切な文脈を与えられると、不適格とされる解釈が取り消され、適格文になることから、語用論の範疇に属する事象であると結論づけることができる。

## 4 まとめ

本稿で述べてきたように、これまで統語論の問題として扱われてきた言語事象には、関係詞化と話題、あるいは主語からの外置構文など、機能論的制約や語用論的要因が密接に関与していることが明らかになった。関係詞化や外置構文のすべてについて、統語論だけ、あるいは語用論だけによって説明しようとするのは、この言語事象の本質を見誤る恐れがある。Kuno (1976) が指摘しているように、主要な統語的制約について、もう一度、機能論や語用論の観点から見直す必要があると思われる。

本稿では、文の意味解釈について、取り消し可能性を判断基準 (9) として規定し、統語的に明示的にコード化され、意味論的に規定された解釈は取り消しできないため文法の範疇に属し、その一方で、推論により語用論的に導かれた解釈は取り消しできるため、語用論の範疇に属することを明らかにした。具体的には、(i) 関係詞化と話題、(ii) 主語からの外置の例を挙げ、その意味解釈に関わる手続きを検討し、コード化された意味と推論による意味の棲み分けについて、その根拠を明らかにしながら考察を行った。

\*本稿は、平成25年～平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（課題番号：25370546、研究代表者：加藤雅啓）の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿を作成するにあたり、Ivan Brown氏からは有益なコメントを得たうえ、例文の判断にも協力いただいた。ここに記して感謝の意を表する。いうまでもなく、本稿の不備は著者のみの責任である。

## 注

- 1) Kuno (1976) はthemeという用語を用いているが、themeには複数の解釈があるため、本稿では「話題」を用いている。
- 2) 談話の話題については様々な議論があるが、Tao (1996) は次のように述べている。“A topic in this study refers to an NP referent that is the center of a discussion in discourse (Givón 1990; Grosz 1977, 1980); thus it is referred to in this study as the discourse topic.” (Tao (1996: 489))

## 参考文献

- Ariel, Mira (2010) *Defining Pragmatics*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Blakemore, Dian (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.
- Carnap, Rudolf (1938) “Foundations of Logic and Mathematics,” *International Encyclopedia of Unified Science*, (eds.) by Otto Neurath, Rudolf Carnap and Charles Morris, 139-214, University of Chicago Press, Chicago.
- Carston, Robin (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Verbal Communication*, Blackwell, Oxford.
- Carston, Robin and Seiji Uchida (1998) *Relevance Theory: Applications and Implications*, John Benjamins, Amsterdam.
- Givón, Talmy (1990) *Functionalism and Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.
- Grice, Paul (1975) “Logic and Conversation,” *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, eds. by Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58, Academic Press, New York.
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- 加藤雅啓 (2013) 「談話における代名詞の指示機能－話題指示と保留指示－：機能文法理論と認知語用論の棲み分け」『言語学からの眺望 2013』福岡言語学会（編），28-40，福岡言語学会40周年記念論文集 九州大学出版会，福岡。
- 加藤雅啓（印刷中）「コード化された意味と推論による意味－統語論と語用論の棲み分け－」『言語研究の視座－坪本篤郎教授退職記念論文集』開拓社，東京。
- Katz, Jerrold (1977) *Propositional Structure and Illocutionary force: A Study of the Contribution of Sentence Meaning to Speech Acts*, T. Y. Crowell, New York.
- Kempson, Ruth (1975) *Presupposition and the Delimitation of Semantics* (Cambridge Studies in Linguistics 15), Cambridge University Press, Cambridge.
- Kempson, Ruth (1977) *Semantic Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 小泉保 (2000) 『言語研究における機能主義－誌上討論会－』くろしお出版，東京。
- Kuno, Susumu (1976) “Subject, Theme, and the Speaker’s Empathy: A Reexamination of Relativization Phenomena,” *Subject and Topic*, ed. by Charles Li, 417-444, Academic Press, New York.
- Levinson, Stephen (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

- 中島平三 (1995) 「主語からの外置－統語論と語用論の棲み分け－」 高見健一 (編) 『日英語の右方移動構文－その構造と機能－』 17-35, ひつじ書房, 東京.
- Nemo, François (1999) "The Pragmatics of Signs, the Semantics of Relevance, and the Semantics/Pragmatics Interface," *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Point of View*, ed. by Ken Turner, 343-417, Elsevier, Oxford.
- Recanati, François (2004) "Pragmatics and Semantics," *Handbook of Pragmatics*, eds. by Laurence Horn and Gregory Ward, 442-462, Blackwell, Oxford.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986, 1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- 高見健一 (1995) 『日英語の右方移動構文－その構造と機能－』 ひつじ書房, 東京.
- Tao, Liang (1996) "Topic Discontinuity and Zero Anaphora in Chinese Discourse: Cognitive Strategies in Discourse Processing," *Studies in Anaphora*, ed. by Barbara Fox, 487-513, John Benjamins, Amsterdam.

# On Cancelability

Masahiro KATO\*

## ABSTRACT

This article deals with the cancelability of sentence interpretations in English with special attention to dichotomy of grammar and pragmatics. The main points argued here are (i) that cancelability of sentence interpretations is the most reliable criterion for a grammatical versus pragmatic account of linguistic patterns, (ii) that coded aspects of interpretations, correlating to specific linguistic forms, are independent of context, and cannot be canceled, and thus are considered to be the issues of grammar, and (iii) that inferential aspects of interpretations are dependent on context, and can be canceled, and thus are considered to be the issues of pragmatics. In the course of discussion, I have analyzed several examples of relativization and extraposition from subjects, and demonstrated that cancelability of sentence interpretations is a valid criterion to distinguish coded aspects of interpretations from inferential ones.

---

\* Humanities and Social Studies Education